

「火災や救急の現場は、自分の全てを出さないといけない場所なんです。そう話すのは、消防士として4年目を迎える永木さんです。現在は上中分署に勤務しており、毎日のように救急での出勤を行っています。」

「現場では、自分と隊が一体になって、訓練で培ったものを出さないとけません。永木さんは、真剣な表情で、自身の経験を語ります。消防士を目指したきっかけは、中学生のときの職場体験。小さい頃から漠然と感じていた消防士への憧れ

小浜で出来ないことは何も無い

が、体験を機に強くなり、高校卒業後に夢を叶えました。13人が勤務する上中分署では、夜勤のときなどは若手職員が食事を作ります。永木さんは、「料理も仕事のうちですね。最近はソースカツ丼を作りました」と、笑顔を見せます。

地元小浜への強い思いを持つ永木さん。最後に、自身の思いを披露してくれました。「小浜で出来ないことは何も無い、と思っています。何も出来ない、と諦めずに、自分たち若い世代でまちを変えていきたいですね」



勤務先 若狭消防署（上中分署）
ながき かずと
永木 和斗さん
(21歳・生守)

放課後、小浜中学校の校舎内から、さまざまな楽器が奏でるハーモニーが聞こえてきます。吹奏楽部で部長を務める加門さんに話を聞きました。小学生のときから、音楽を聴くのが好きだったという加門さん。「自分でも演奏してみたい」と、思い、中学校で吹奏楽部の門を叩きました。

入部のときに選んだ楽器は、トランペット。「華やかなイメージに憧れがありました。演奏は難しいですが、上達できるように、毎日コツコツ練習しています」と、笑顔で話します。

コンクールを目指して前へ！

練習のきいもあり、1月のアンサンブルコンテスト嶺南大会では、加門さんら金管楽器奏者5人のチームが、金賞を獲得。次は、夏の吹奏楽コンクールでの金賞を、部員22人で目指します。

憧れの人を訪ねると、「前部長である先輩です。厳しくも、優しく、声を出してみんなを引っ張ってくれました」と、教えてくれました。

「私は、言葉をはっきり伝えるのが苦手。でも、副部長2人が支えてくれるので、自分も成長したいです。そう話す瞳はまっすぐ前を向いていました。」



吹奏楽部 部長
かもん あずみ
加門 亜澄さん
(小浜中学校3年生)

大好きな小浜の海とともに

小浜市海のまちづくり協議会が、海に関わる若者や一般市民と情報交換ができる場を作ろうと、立ち上げた『海のまちづくり未来会議』。会議に参加する小畑さんにインタビューしました。幼い頃から海が好きだった小畑さん。若狭高校で当時担任の小坂先生に誘われ、ダイビング同好会に入部。ダイビングの魅力が、「小浜の海の中に浮かびながら見る、空や海の生き物が好きです」と、笑顔で教えてくれました。

同好会の部長を務めながら、アマモマーマイイドプロジェクトや砂浜の生物

調査にも参加。未来会議では、同世代との意見交換や活動に、「自分のような若い世代でもまちづくりに参加できるんだ」と、刺激を受けたと言います。

4月から県立大学海洋生物資源学部1年生となる小畑さん。関心のあった小浜の海底湧水の調査研究に取り組み、「研究成果で小浜の水産業を活性化させたいです」と、意欲を見せます。

「大学卒業後は、若狭高校の教員として、尊敬する小坂先生と同じ教壇に立ちたいです」。そう話す小畑さんの顔は海のようにキラキラと輝いていました。



海のまちづくり未来会議
おばた ゆうみ
小畑 有海さん
(18歳・四谷町)

はじめをつけて、良いチームに

小浜第二中学校サッカー部のキャプテンを務めるのは、センターバックとして活躍する水口くんです。昨年、部内の推薦でキャプテンとなって以来、部のまとめ役として奮闘しています。

水口くんとサッカーとの出会いは、小学3年生のとき。友だちに誘われて教室に通い出し、それ以来サッカーに魅了されました。水口くんは、「連携プレーが重要なスポーツなので、連携が決まって得点したときが一番気持ちいいですね」と、競技の魅力を明るく口調で語ります。

部員数13人と少数精鋭ですが、水口くんは「明るくて元気のあるチーム」と、自分たちを評します。キャプテンとして気をつけているのは、チームの方向性。練習中に私語をしたり、覇気がなかったりする部員には、チーム全体のために、積極的に注意しています。

「みんながはじめをつけて、日々の生活をしっかりすれば、もっと良いチームになっていくと思います」と、力強く語る水口くん。理想とする『堅守速攻』のチームを目指して、今日も元気に練習に励みます。



サッカー部 キャプテン
みなくち たけし
水口 壮くん
(小浜第二中学校3年生)

西津漁港の夕日

JR小浜駅から国道162号線をまっすぐ進み、橋を2本越えたところに「西津漁港」があります。

大陸からの入り口でもあり、古くから天然の良港として栄えていました。

西津漁港は津島・甲ヶ崎・仏谷の3つの漁港と共に小浜漁港と呼ばれています。

どこことなく懐かしく、生活感が絵になる漁村を見ることができるのは、とても貴重なことです。小浜漁港付近のまちには、狭い範囲で、そのような景観がたくさん残っています。

天気の良い日にカメラを持って、自転車で漁港を回るのもおすすめです。ステキな景色とかわいい猫に出会えるかもしれません。



【問い合わせ】
 若狭おばま観光案内所 ☎ 52・2082
 【アクセス】
 小浜市下竹原
 JR小浜駅から自転車で30分
 有料レンタサイクルは観光案内所まで
 (文と写真:地域おこし協力隊ハラ)

イチ押し! トップアスリート

挑戦を続けるベテランスキーヤー

スキーの普及と競技者・指導者の受け皿として活動するスキー連盟。連盟に所属して活躍するベテランスキーヤーの畠中さんに話を聞きました。
 実家の裏山で、竹スキーをしたのが初体験という畠中さん。「小学校入学前には、母がスキー板を買ってくれたらいい、熱中していました」と話します。
 その後、いったんスキーから離れませんが、就職で地元に戻ったのを契機に再開。スキーを楽しむとともに、指導者の資格を取得して、子どもたちの指導にもあたるようになります。

畠中さんに転機が訪れたのは、2年前。連盟の仲間から誘われる形で、競技スキーに没頭していきまふ。「恐怖心もありましたが、徐々に楽しさに目覚めていきました」と、振り返ります。
 今年の中部日本スキー大会では、選考会を突破して、ジャイアントスラローム成年E(55歳以上の部門)に県代表として出場、完走を果たしました。
 競技のやりがいを探ると、「何歳になってもできる生涯スポーツなのが魅力ですね。皆さんもぜひ挑戦してください」と、笑顔で話してくれました。



上 / 先頭のゼッケン「128」が畠中さん

小浜市スキー連盟
 はたけなか おさむ
畠中 収 さん
 (58歳・山手三丁目)

健康長寿のススメ

市では、認知機能アップのプログラムを取り入れた教室を行っています。
 人間の脳には、一度機能が低下しても、また使えば強くなる回復力があります。
 また、人と話したり、いろいろな人と出会うだけでも、記憶力、注意力などが鍛えられます。
 物忘れが気になる人や、閉じこもりがちな人は、男女問わず、ぜひ参加しましょう。

認知症
 予防
 脳とからだの
 体操教室



● 次回のテーマ
 「毎ページファースト5」

■ 問い合わせ 地域包括支援センター ☎ 64・6015

知って安心 認知症⑥

広げよう! 認知症予防と支援の輪

「知って安心 認知症」の最終回となる今回は、市で行っている認知症予防と支援の活動をご紹介します。
 認知症になっても、安心して暮らせるまちづくりを目指して、あなたも参加してみてください。

認知症
 支援
 認知症サポーター
 養成講座

市では、認知症を正しく理解して、認知症の人や家族を見守る応援者「認知症サポーター」を養成しています。
 周囲の人が認知症の人のペースに合わせてゆっくりとした接し方をすることは、認知症の進行を防ぐことにつながります。
 自治会、サークル、学校など5人以上のグループであれば、市内どこでも講座を行います。

アート&カルチャー

世阿弥ゆかりの地、能に関心を

観世流謡曲仕舞の会「小浜謡楽会」には、現在60代から80代の女性5人が所属しています。
 代表を務める村山さんは、謡曲を始めて4年ですが、出会いは子どもの頃にさかのぼります。「私の母も謡曲を習っていたんです。小学生のころ、母が家でお稽古をしていたのを今でも覚えています」と、幼い頃を思い返します。
 同会では、能の筋書きを誦す「素謡」と、能の所作の一部を舞う「仕舞」を稽古します。会の指導者は、若狭町



上 / 代表の村山さん 下 / 会員の皆さんと指導者の武田さん(後列中央)



小浜謡楽会 (謡曲仕舞) 代表
 むらやま のりこ
村山 典子 さん
 (64歳・一番町)

在住の能楽師の武田欣司さんです。当初は、「厳しくて怖い先生」という印象を持っていた村山さん。今では、「厳しい指導のおかげで、鍛えられ向上につながります」と、深い感謝の気持ちを述べています。
 謡曲を通して、能の奥深さに関心をもちようになった村山さん。能楽の基礎を築いた世阿弥が、小浜から佐渡に配流された歴史に触れ、「世阿弥ゆかりの地の小浜で、能に関心のある人を少しでも増やしたいですね」と、今後の抱負を穏やかに話してくれました。